

## 会告

平成十四年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（土）午後一時より京大会館にて開催されました。

公開講演は西山良平、井上浩一の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

平安京の〈家〉と住人

西山良平氏

女性歴史家アンナ・コムネナ

—ビザンツ帝国の政治と歴史—

井上浩一氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成十四年度会務報告がなされました。

## 平成十四年度

### 史学研究会大会講演要旨

平安京の〈家〉と住人

西山良平

本報告では、平安京の〈家〉と住人のあり方を検討する。

十世紀末期には、平安京で住人の呼称・概念が成立する。また、「家別」に収取が開始されるが、この〈家〉は直接には建築としての家である。平安京では、青侍が「家ナド儲テ楽シクソ有ケル」とあって、家の所有は住人の身分・地位の象徴となっている。

都市や農村では、「血縁のない者」が死去すると山野や河原に遺棄され、家族がいと葬送される。ところが、「血縁のない者」でも家を所有すると、葬送はされないが、〈家で死ぬ〉。したがって、死や葬送は、家族と家の所有の二側面から考察する必要がある。宮仕への女房や従者は「里」があり家があると、病気になるっても家に退出する。〈家で死ぬ〉、葬送される。

主人や家族の重要な成員は家を穢とする

資格を持つ人間である。一方、従者や下女は家を穢することを許されず、家の外に追い出される。しかし、この従者は女房には二類型があり、家を所有すると、自分の家へ搬出され、〈家で死ぬ〉。家を所有しないと、路頭などに遺棄される。家の外部（たとえば大路）で死ぬことは「恥」と意識された。家で死ぬない人々は、第一に、重犯など、家を所有してもその外部での死を強制される場合がある。第二には、家を所有せず、局住みや路上生活者がある。

女性が出産するのにも家が必要である。女性は自分や家族の家で出産すると推定され、家を所有せず局住みの女房は家を借用して出産する。家の借用には、家主の許諾が必要である。主人以外の従者や下女は出産で家を穢れとすることができず、自分の家を所有しないと、別の家を借用するしかない。

「家主」は自分の家へ病者を受け入れる裁量権を持っている。この家主は家族（血縁）ばかりでなく、「知人」の場合があり、女性の出産を許諾する権利も持つ。反面、自分の家を所有しても他人に依頼し、他人の家を借用することがある。知人が葬送す

ることでもでき、逆に家族でも追い出しがありうるが、これは強く批判されている。さらに、知人ですらなくとも、家主の許諾さえあれば、死や産は十分に可能である。

とはいえ、家の所有は万能ではなく、安穩な生活には家族の存在が不可欠である。また、死や産など生命の危機管理のほか、日常的な社会生活の維持の問題がある。さらに、生命の維持に必要な知人の実態や、隣人関係（地縁）の位置付けが今後の課題である。

### 女性歴史家アンナ・コムネナ

—ビザンツ帝国の政治と歴史学—

井上 浩 一

十二世紀の女性歴史家アンナ・コムネナ（一〇八三—一五四年頃）は、歴史学が盛んであったビザンツ帝国においても、もっとも優れた歴史家といわれている。父アレクシオス一世（在位一〇八一—一一一八年）の治世を記したその著作『アレクシオス一世伝』は、事実の探求、ひとつのテーマをもったまとまった叙述、生き生きとし

た人間描写などによって高く評価されてきた。

ところが近年、『アレクシオス一世伝』の事実上の著者はアンナではなく、彼女の夫プリュエンニオス将軍——アレクシオスの即位以前を扱った『歴史』を著した歴史家でもある——であったという説が出され、学界に衝撃を与えた。

この新説は次のような議論を展開している。『アレクシオス一世伝』は戦争中心の歴史書であって、宮廷に暮らし、文化や教養に強い関心をもっていた女性アンナが書いたものとは思えない。プリュエンニオスがアレクシオス一世の治世を書く予定であったことは、アンナ自身の言葉などからも確認できる。彼は病のため、その冒頭部分を『歴史』として残してこの世を去ったが、治世全体を扱った草稿をまとめていたに違いない。アンナは、夫の死後、この草稿に手を加えて『アレクシオス一世伝』を書き上げた。

『アレクシオス一世伝』の著者問題について、さしあたりふたつの側面から考えてみたい。①アンナの経歴と、②夫婦の著作の比較である。

①一〇八三年コンスタンティノープルの宮殿の「緋色の間」に生まれたアンナは、前半生を宮廷で暮らし、古代ギリシアの学問（文法・修辭学・哲学）を学んだ。同時に、早くから政治にも強い関心をもっていたことが注目される。アレクシオス一世の晩年には弟ヨハネスの帝位継承に横やりを入れ、ついにはクーデターさえも敢行している。一一一九年のクーデターは失敗に終り、アンナは後半生を修道院で過ごすこととなった。文化人のサロンでもあったこの修道院で、彼女は、夫が果たせなかったアレクシオス一世の歴史の執筆を晩年の仕事とした。

確かに戦場に立ったことはなかったが、政治への関心ももち続けていたアンナが、父の最大の治績として外敵との戦争を取り上げたのは当然であろう。祖母アンナ・ダラセナが摂政として全権を任されたことを強調していること、アレクシオス一世の対トルコ政策を賞賛することで、間接的に弟ヨハネス二世を批判したところにも、アンナの意図に沿った歴史編纂が窺える。

②プリュエンニオスの『歴史』と『アレクシオス一世伝』がともに扱っている一〇

七七八八年の反乱（ブリュエンニオスの祖父が起こし、アンナの父アレクシオスが鎮圧した）の記事を比べると、アンナの歴史家としての優れた能力を窺うことができ

る。  
自分が生まれる前の事件を記すにあたってアンナは夫の『歴史』を参照した。アンナの叙述には、現存しているブリュエンニオスのテキストと矛盾するような文言もみられるが、これは不注意に写し間違えたものではなく、後世のブリュエンニオスの写本筆者が誤ったもので、アンナは原本を正確に読み取ったうえで利用している。しかも、反乱の前半を思いきって削除したり、聞き取りに基づく独自の情報を盛り込んだりして、アレクシオス一世賞賛というテーマに沿って全面的に書き改めている。『歴史』にはほとんどみられない、ホメロスの引用も、父を称えるという目的から彼女が積極的に行なったものである。

確かに、ブリュエンニオスの草稿がなかったと結論することは難しい。しかし、完成された作品である『歴史』を利用するに際しても、大幅に書き換えているアンナであるから、たとえ草稿があったとしても、

独自の調査を踏まえて、全面的に書き改めたであろう。

私たちが読む『アレクシオス一世伝』はやはりアンナ・コムネナの著作である。

## 受 贈 誌

(二〇〇二年八月一九日)  
二〇〇二年一〇月三日)

岐阜経済大学論集（岐阜経済大学学会）三

五―四

アジアセンターニュース（国際交流基金ア

ジアセンター）二―

中央研究院歴史語言研究所集刊（中央研究

院歴史語言研究所）七三―二

熊本史学（熊本史学会）七八・七九合併号

経済論集（서울大学校経済研究所）四―

二―

Вестник Древней Истории (Институт

Всеобщей Истории РАН) 2002-2 (241)

Этнографическое обозрение (Институт

Этнологии и Антропологии имени Н.

Н. Миклухо-Маклая РАН) 2002-3

史料（皇学館大学史料編纂所）一七三―一

八―

文書館だより（栃木県立文書館）三三―

愛知大学文学論叢（愛知大学文学会）二二

六―

龍谷史壇（龍谷大学史学会）一一八

人文学報（京都大学人文科学研究所）八六